

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：26401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04228

研究課題名(和文)4テーマ分析法を用いた虐待予防-「虐待リスク」を抱える保護者支援法(2)-

研究課題名(英文)Abuse Prevention Using 4-theme Analysis Method - Support for Parents with "Abuse Risk" (2) -

研究代表者

杉原 俊二(Sugihara, Shunji)

高知県立大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：50259644

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文):本研究は自分史分析による児童虐待予防について、「改良4T法」を考案し、地域の相談機関でも使用できるように改善を図った。児童家庭支援センター(児家セン)2か所と家庭児童相談室(家児室)2か所で実際に地域の相談員が使用できるかを確認し、一定の良い効果があることも確認できた。さらに支援者からの調査によれば、このクライアント自身の「自分史」を使った支援(改良4T法)は、クライアントの「合う」「合わない」といった適合性があり、それが適合するかを始める前に見極める必要があることも分かった。つまり、万能ではないということである。それらの指標をまとめていく必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、児童虐待についての研究も進み、それまで児童虐待とみなされないことも、児童には問題となるため、児童虐待とみなされるものが多くなった。それに対して、育児をする保護者や子供の成長を見守る教師たちに、「どのようにしてよいかわからない」とか「自信がない」といった言葉が多く聞かれる。「自分史」を振り返る中で、「自分が嫌だったことはしない」とか「カッとならない」といったことを学ぶ機会になれる。つまり、セルフヘルプが可能になる。また、具体的な育児の相談などが地域の相談員にできるようになり、自分なりの育児のやり方を見出していた。自分史を使った支援について、意味は大きいと思われる。

研究成果の概要(英文): In this study, we devised an "improved 4T method" for the prevention of child abuse based on self-historical analysis, and improved it so that it can be used at local counseling institutions. It was confirmed that local counselors could actually use the service at two Child and Family Support Centers (Kie Sen) and two Family Child Counseling Rooms (Kagoshitsu), and it was confirmed that there was a certain positive effect. Furthermore, according to a survey from supporters, this support using the client's own "history" (improved 4T method) has compatibility such as "matching" and "not matching" with the client, and it is compatible. I also found that I need to assess before I start. In other words, it is not omnipotent. It is necessary to collect those indicators.

研究分野：児童・家庭福祉分野

キーワード：児童虐待 自分史分析 4テーマ分析法 虐待予防 保護者支援法 改良4T法 家庭児童相談室 児童家庭支援センター

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 自分史分析について

杉原(2006a、b)は自分史を用いたセルフヘルプ(セルフケア)の一技法として、「自分史分析」を開発した(自分史分析は杉原の造語)。最近では、援助方法として、自分史(あるいは自分史分析)を積極的に取り上げる例が増えてきた(中村2006など)。また、自分史の書き方についての講座が各地で開催され、自分史を書いて自費出版する人も増えている。自分史に対する関心は年々高まっているといえる(杉原2016)。

杉原は当初、自分史分析をセルフスーパービジョンの方法として提案し、その後「ナラティブアプローチ」(White, M. & Epston, D. 1990、小森・野口・野村1999などを参照)の一技法として位置づけ、現在は2つの自分史分析を実践している。一つは、「自分の人生を自ら書き出し、自ら分析する(他者と一緒に分析することも可)」方法である。既に「セルフ・カウンセリング」(渡辺2003)として一定の方法がある。その後、1つのエピソードを中心に書く「エピソード分析」と、それよりも大きなテーマを決めて自分史を書く「テーマ分析」(例『父親との関係』『仕事と自分』)を区別して検討している。もう一つは、「自分の人生(半生)を他者にインタビューしてもらい、自分と他者の2人(以上)で分析する」方法である。杉原は、これを「生活史分析」として、現在まで30名以上のインタビューを行っている(杉原2006a、b、杉原2009a、b)。

なお、類似の技法として、回想法やライフストーリーワーク(LSW)がある。回想法(Butler, R. N. 1963、黒川ほか1999)は古くからあり、主として高齢者の支援方法として実践されている。先駆的存在といえるが、自分史分析の方が対象年齢を思春期以降から高齢者までとして、幅広い対応をしている(技法としてのバリエーションも多い)。LSWは、社会的養護の子どもたちの自己肯定感を待つための技法として用いられている(才村2009)。ライフヒストリーを書きだして、ライフストーリーを導き出す点など、自分史分析との類似点も多い。

杉原は、平成23年より日本家族研究・家族療法学会で、4T法についての研究発表をしている。そこで関心を持った複数の研究者により、ナラティブアプローチの「多声的な支援法」(松嶋2013)や、「オープンダイアログ」(斎藤2015)との関連性について、2016年から検討が行われている。

### (2) 4テーマ分析法(4T法)

「自らの人生を他者にインタビューしてもらい、自分と他者の2人(以上)で分析する」方法といっても、一定の方法が存在するわけではない。杉原も試行錯誤を繰り返している最中である。特に、自分史分析の中心である「自分史をどのように記述するか」については、一つの方法が決められない状態である。先行している社会学でも「ライフストーリー・インタビュー」として一定の方法論があるわけではない(Emerson, R., Fretz, R. & Shaw, L. 1995、桜井2005、徳田2004)。また、「生活史分析」を実施するために、面接を20回近くすることが多く、時間がかかることが問題であった。そこで、対象者の年表を作成して、その中から4つのテーマを選び、それをテーマ分析する「4テーマ分析法」(以下、4T法)を考案し、実践している(杉原2010)。

### (3) 虐待リスクのある保護者への支援方法

杉原は、平成13年度から20年度まで保健所で母子保健領域での「子育て相談」を行い、平成21年度から現在までスクールソーシャルワーカーのスーパーバイザーとして、児童虐待の問題に直接・間接的にかかわってきた。その中で、「虐待リスク」を、保護者の立場か

ら「育てにくさ」地域の援助者の立場から「気になる子ども」「気になる親」と言い換えて、親支援を行ってきた。「児童相談所の後方支援化により児相マターでなく、地域で要保護・要支援の必要な家族が増えているにもかかわらず、その対応は十分とはいえない」(松宮2011)。そのため、地域の中では有効な支援方法が求められている。

杉原は、平成26年度から3年間、基盤研究(C)「4テーマ分析法を用いた児童虐待防止への支援 - 『虐待リスク』を抱える保護者支援法 - 」として、自分史分析をもちいた保護者支援法を検討してきた(以下、「前回の研究」とする)。前回の研究の本調査では、精神科診療所へ通院時か、本人や家族の主訴に対する心理療法(家族療法)をおこなっている時に、実子に対して「何らかの虐待と思われる行動をおこなっている」という告白があり、その問題に対する4T法の実施に協力をしていただける実親を対象とした。

本調査では8人(男性1、女性7)に実施し、全員から虐待リスクの低減が語られ、自尊感情尺度やスケーリングクエスチョンなどでも、良好な結果が得られた。特に、4T法の開始から徐々にセルフケアに対する意識や意欲が高まり、杉原が示唆したコーピングだけでなく、マインドフルネスに取り組む人も出てきた。ただ、4T法の実施に際して、様々な工夫をする必要があることも分かってきた。

#### (4) 文献

Butler, R. N. (1963) The life review: An interpretation of reminiscence in the aged  
Psychiatry, 26, 65-76.

Emerson, R., Fretz, R. & Shaw, L. (1995) Writing Ethnographic Fieldnotes. (= 1998, 佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳『方法としてのフィールドノート - 現地取材から物語(ストーリー)生成まで』新曜社.)

黒川由紀子・松田修・丸山香・斎藤正彦(1999)『回想法グループマニュアル』ワールドプランニング.

小森康永・野口裕二・野村直樹(1999)「ナラティブ・セラピーの世界へ」小森康永・野口裕二・野村直樹(編)『ナラティブ・セラピーの世界』日本評論社, 3-13.

松宮透高(2011)「児童虐待事例に対する問題解決アプローチ - 北海道浦河町におけるメンタルヘルス問題のある親への支援実践から」『社会福祉学』52(3), 40-52.

中村卓治(2006)「実践から捉えるソーシャルワークの価値の検証 - 精神保健福祉士の視点から」吉備国際大学大学院社会福祉研究科(通信制)2005年度修士論文.

才村眞理(2009)『生まれた家族から離れて暮らす子どもたちのためのライフストーリーブック』福村出版.

桜井厚(2005)『ライフストーリー・インタビュー - 質的研究入門』せりか書房.

佐藤郁哉(1992)『フィールドワーク 書を持って街へ出よう』新曜社.

杉原俊二(2006a)「自分史分析に関する一考察( ) 自分と向き合うことと語り」『吉備国際大学社会福祉学部研究紀要』11, 115-128.

杉原俊二(2006b)「自分史分析のフィールドノート( ) - ある国立大学教授の学歴・職歴より」『人間科学研究』3, 1-10.

杉原俊二(2009a)「自分史分析に関する一考察( ) - うつ症状からの回復」『吉備国際大学研究紀要(社会福祉学部)』19, 11-22.

杉原俊二(2009b)「自分史分析のフィールドノート( ) - 元信金職員の『うつ』との付き合い方」『人間科学研究』6, 1-12.

杉原俊二(2010)「自分史分析に関する一考察( ) - 4テーマ分析法によるライフストー

- リーの生成」『高知女子大学紀要（社会福祉学部）』59, 47-66 .
- 杉原俊二（2011）「4テーマ分析法を用いた『うつ経験者』の回復期支援法（ ） - うつ経験者への予備調査の検討」『人間科学研究』8, 7-12 .
- 杉原俊二（2012）「自分史分析に関する一考察（ ） - うつ経験者の4テーマ分析法での中断・再開事例の検討」『高知県立大学紀要（社会福祉学部）』61, 25 - 40 .
- 杉原俊二（2016）「心理的支援としての自分史」『自分史研究会雑誌』3, 2 - 9 . .
- 徳田治子（2004）「ライフストーリー・インタビュー」無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ（編）『質的心理学 - 創造的に活用するコツ』148-154 . ミネルヴァ書房 .
- 渡辺康麿（2003）『自分を見つける心理分析 - セルフ・カウンセリング入門』講談社 .
- White, M. & Epston, D. (1990) Narrative Means to Therapeutic Ends. W. W. Norton, New York. (= 1992, 小森康永訳『物語としての家族』金剛出版.)
- やまだようこ（2000）「人生を物語ることの意味-ライフストーリーの心理学」やまだようこ（編）『人生を物語る - 生成のライフストーリー』1-38 . ミネルヴァ書房 .

## 2 . 研究の目的

本研究の目的は、地域の中に多く存在する児童虐待リスクのある保護者に対して「自分史分析」の「4テーマ分析法」を用い、それによって対象者自身の「虐待リスク」や支援ニーズを認識できる、有効な援助方法を開発し、検証することである。特に、地域の機関で使用できるようにマニュアルを作成する。この方法は、加害者となっている保護者に対する支援方法であり、心理的虐待やネグレクトなどを起こす可能性のある家族に対する、有益な支援方法となることが期待できる。

## 3 . 研究の方法

虐待リスクのある保護者に、改良された4T法(改良4T法)を実施し、自分史を用いた援助方法がそのような保護者の支援に使用できるかどうかを検討する。また、地域の機関で簡単に使用できるように、方法を定めたマニュアルを作成する。そのため、平成29年度は、「虐待リスクを抱えている保護者」へ調査を実施する。

平成30年度は、前年度の調査の追跡調査と、地域の機関での改良4T法をもちいた調査(保護者8名)を実施する。平成31年度は前年度の調査の追跡調査を実施して、有効性の検証を行う。また、研修会を開催して、虐待予防に役立てる。

平成31年度は、前年度に調査を実施した対象者(地域で虐待リスクを抱えている保護者)に対して追跡調査を行う。これは、8人に対して半構造化インタビューを1回行う。また、これまでの援助の中で浮かび上がった問題点を整理し、援助方法として簡単に実施可能なものに近づけ、マニュアル化して、実際の支援に結びつける。

また、研究結果をもとに、東京、大阪、高知で研修会を開催する。さらに、これまでの内容をまとめて学会発表を行い、次いで論文にまとめて学会誌へ投稿をする。

新型コロナの蔓延により、インタビューが中止になるなど悪影響もあった。その分、支援者の人にどのように行っているかについて確認した。

## 4 . 研究成果

本研究は自分史分析による児童虐待予防について、「改良4T法」を考案し、地域の相談機関でも使用できるように改善を図った。児童家庭支援センター(児家セン)2か所と家庭児童相談室(家児室)2か所で実際に地域の相談員が使用できるかを確認し、一定の良い効

果があることも確認できた。

さらに支援者からの調査によれば、このクライアント自身の「自分史」を使った支援（改良4T法）は、クライアントの「合う」「合わない」といった適合性があり、それが適合するかを始める前に見極める必要があることも分かった。つまり、万能ではないということである。それらの指標をまとめていく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

|  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 著者名<br>杉原俊二                             | 4. 巻<br>22         |
| 2. 論文標題<br>自分と他者の『自分史』を見つめて 自分史分析20周年を振り返る | 5. 発行年<br>2023年    |
| 3. 雑誌名<br>人間科学研究                           | 6. 最初と最後の頁<br>2-12 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし              | 査読の有無<br>有         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難     | 国際共著<br>-          |

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>杉原俊二                           |
| 2. 発表標題<br>自分と他者の『自分史』を見つめて 自分史分析20周年記念講演 |
| 3. 学会等名<br>日本人間科学研究会第20回記念大会              |
| 4. 発表年<br>2022年                           |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>杉原俊二  |
| 2. 発表標題<br>4テーマ分析法を用いた虐待予防(4) - 支援者の側から見た4T法の実施(その2) - |
| 3. 学会等名<br>日本家族療法学会第39回淡路大会                            |
| 4. 発表年<br>2022年  |

|                                    |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>杉原俊二                    |
| 2. 発表標題<br>保護者の『語り』と児童虐待の予防        |
| 3. 学会等名<br>高知県立大学2021年リカレント教育(Web) |
| 4. 発表年<br>2021年                    |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>杉原俊二                               |
| 2. 発表標題<br>4テーマ分析法を用いた虐待予防(3) 支援者の側から見た4T法の実施 |
| 3. 学会等名<br>日本家族療法学会第38回東京大会                   |
| 4. 発表年<br>2021年                               |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>杉原俊二                                |
| 2. 発表標題<br>4テーマ分析法を用いた虐待予防(2) 地域の相談機関で行った改良4T法 |
| 3. 学会等名<br>日本家族療法学会第37回東京大会                    |
| 4. 発表年<br>2020年                                |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>杉原俊二                                  |
| 2. 発表標題<br>4テーマ分析法を用いた虐待予防 - 改良4T法によるマニュアル作成のヒント |
| 3. 学会等名<br>日本家族療法学会第35回ぐんま大会                     |
| 4. 発表年<br>2018年                                  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>杉原俊二                              |
| 2. 発表標題<br>児童虐待のリスクへの支援方法 - 保護者の育ちを振り返る自分史 - |
| 3. 学会等名<br>2018年第4回学術的交流サロン(高知県立大学池キャンパス)    |
| 4. 発表年<br>2018年                              |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>杉原俊二   |
| 2. 発表標題<br>4テーマ分析法を用いた地域での虐待予防の研究構想 - 虐待リスクを抱える保護者への支援法 - |
| 3. 学会等名<br>第41回KJ法学会（川喜田研究所）                              |
| 4. 発表年<br>2018年   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>杉原俊二                               |
| 2. 発表標題<br>「虐待リスク」を抱える保護者支援法（7） - 追跡調査による検討 - |
| 3. 学会等名<br>日本家族研究・家族療法学会第34回つくば大会             |
| 4. 発表年<br>2017年                               |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>杉原俊二                              |
| 2. 発表標題<br>4テーマ分析法を用いた虐待予防（1） - 研究計画と実施の準備 - |
| 3. 学会等名<br>第40回KJ法学会                         |
| 4. 発表年<br>2017年                              |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|                           |                       |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件



8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|